

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 石川 達夫

本論文は、チェコ文化史上重要な役割を果たし、他のスラヴ諸国にも影響を与えた 18 世紀後半から 19 世紀前半のチェコ民族再生運動の全体像を明らかにし、この運動の意味を現代的な観点から探った研究である。

本論文は序章と、全四部八章からなる本論、そして結論にあたる終章と、研究史を概観した補章から構成される。

第Ⅰ部「チェコ民族再生運動の前提と歴史」では、第一章において、大民族と隣り合ってヨーロッパの中央に住むチェコ人が辿った複雑な歴史を概観するとともに、チェコ民族再生運動の前提を検討し、第二章で、一部の知識人によって始められた運動が発展していった歴史的過程を追っている。

第Ⅱ部「チェコ民族再生運動期の文化と表象」では、第三章において、言語・文学・演劇・音楽・美術などの文化・芸術の分野で、再生運動がいかに進展したかを具体的に明らかにし、第四章で、建国伝説、詩、音楽、劇場などの具体的な事例に即して、いかに「起源」「民族」「祖国」などの概念が表象され、チェコ人のアイデンティティが形成されていったかを分析している。

第Ⅲ部「チェコ人とスラヴ人」では、第五章において、チェコ民族再生運動に伴って現れたスラヴ主義とこの運動との複雑な関係を解明し、第六章で、同じスラヴ人でも民族再生運動に「成功しなかった」ソルブ人と「成功した」チェコ人の運命を分けたものが何だったのかを考察している。

第Ⅳ部「チェコ民族再生運動とチェコ・ナショナリズム」では、チェコ民族再生運動から発展したチェコ・ナショナリズムの弱点を克服する試みと努力について、第七章においてマサリク、第八章においてボルザノとパトチカという思想家たちの著作と活動に即して検討している。

終章では、チェコの歴史的事例に即して小民族の存在の意味を改めて考察し、チェコ民族再生運動は言語と文化の「かけがえのなさ」を根拠とした小民族の存在の擁護であり、世界の多様性の擁護にもつながるものであった、という著者の主張が示される。この主張は、民族問題が新たに噴出しつつある現代世界の状況を強く意識したものである。

本論文は包括的・総合的研究を目指したものであるため、時に概観的な記述に力点が置かれる一方で、個別には分析が十分深められていない事例も散見される。しかし、著者は長年にわたるチェコ文化史研究の蓄積を生かし、大量の文献を博搜したうえで、極めて広い視野から文化・芸術の様々な分野を横断して、「民族再生運動」という視点からこの時期のチェコ文化の発展過程を描き出すことに成功した。このような研究は、日本では前例がないだけでなく、国際的にもあまり類例を見ない学術的貢献として高く評価することができる。また本論中の文学・芸術作品の事例の具体的な分析には多くの創見が含まれ、チェコ民族のアイデンティティを支える文化の特徴を鮮やかに示すことになった。

以上のことから、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。